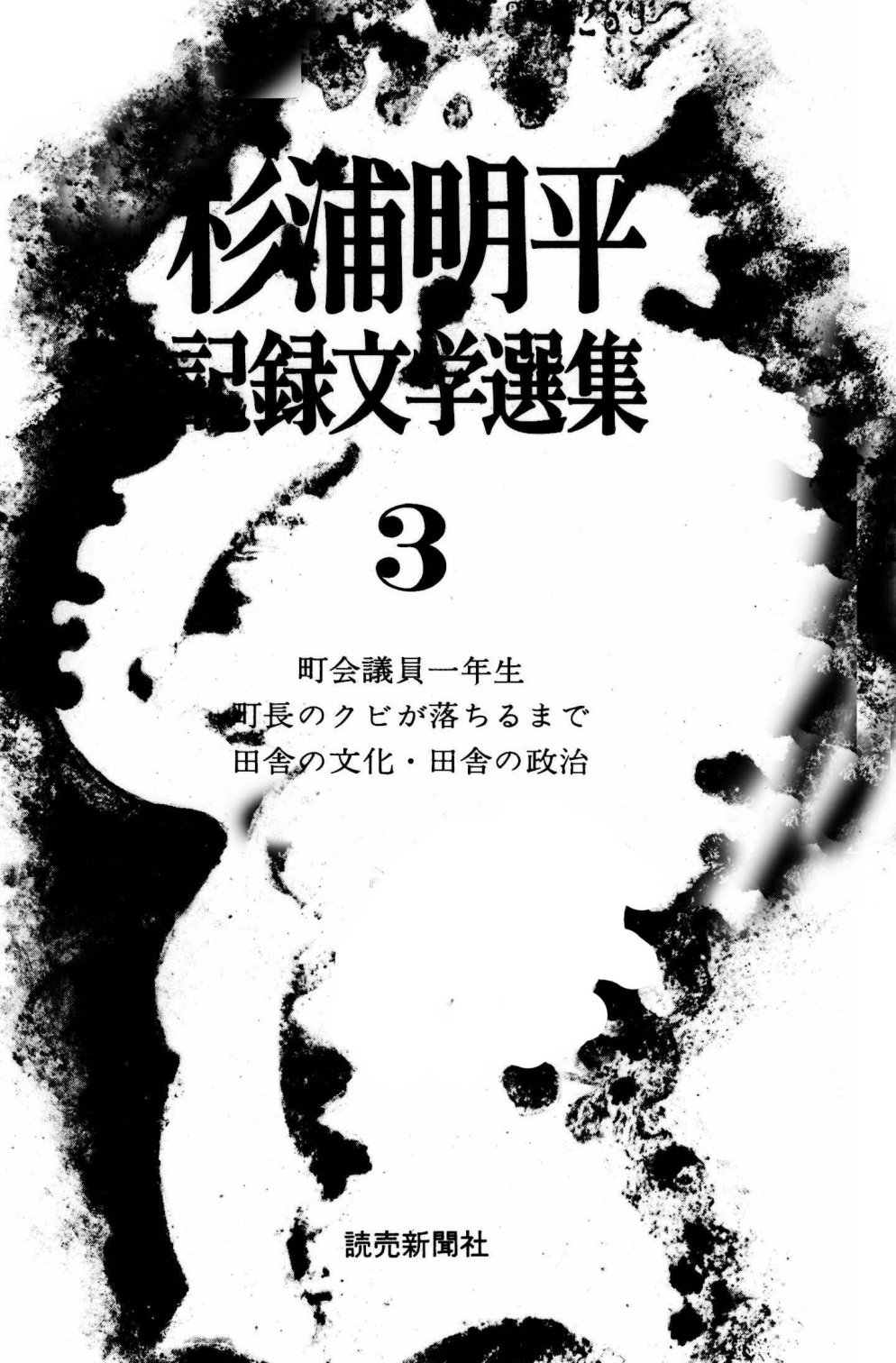




2095

杉浦明平

記録文学選集

3

町会議員一年生
町長のクビが落ちるまで
田舎の文化・田舎の政治

読売新聞社

杉 浦 明 平

作家・文芸評論家。大正二年愛知県渥美郡福江町（現在は渥美町）生まれ。東大国文科卒。同大学院に在学中、東京外語大でイタリア語を学び、ルネッサンス文学を研究、社史編纂、雑誌編集等の仕事に就く。敗戦後は故郷で文筆業に専念。かたわら、昭和二十四年日本共産党入党、約十年間在籍し、二十七年には福江町教育委員、三十年から三十八年まで渥美町議会議員として活躍した。現在新日本文学会会員。代表作に「椿園記」「小説 渡辺崋山」がある。現住所 愛知県渥美郡渥美町折立

杉浦明平記録文学選集 3 全4巻

町会議員一年生 ほか

昭和四十七年二月二十日 第一刷
昭和四十八年五月十五日 第二刷

著者 杉浦明平

発行者 松田延夫

発行所 読売新聞社

〒100 東京都千代田区大手町一―七―一

〒530 大阪市北区野崎町七七

〒802 北九州市小倉区明和町一―一―一

印刷 大日本印刷株式会社

製本 協和製本株式会社

定価 八五〇円

©, Minpei Sugitara. 1972

第三卷 目次

町会議員一年生

3

町長のクビが落ちるまで

199

田舎の文化・田舎の政治

249

解説 小田 実

407

装
丁
水
谷
勇
夫

町会議員一年生

——一学期の巻——

町長さんと議長さんが自己紹介

それでは、わたくしのような爺じいが最初に立っては、生きのええりっぱな名士がたにたいして失礼とも存じまするが、作者の御指名によりまして、最初に自己紹介をいたさせていただきます。わたくしは当渥美町の町長間瀬まぜ勸作かんさくでございます。

頭はだいぶはげておりますが、まだ年はたった七十で、これからというところでございます。三年後の選挙にも、もう一度打って出てみるくらいの精力は、じゅうぶんもっております。

このたびの選挙には、えらく苦戦いたしました。が、町民のみなさんの絶大なる御支援のおかげをもちまして、ぶじ当選の栄冠を獲得させていただきましたのでございます。なぜ苦戦したかと申し上げますと、わたくしの地盤、旧伊良湖岬村は三千票しかございませんのに、相手のS・Gさんは八千四百票を擁する旧福江町の公認候補だったからでございます。

ごぞんじのかたも多かろうと存じますが、はじめてのかたに御説明申しあげますならば、一九五五年四月に、町村合併促進令にしたがって、福江町、伊良湖岬村、泉村の三町村が解消合併いたしました、当渥美町が誕生しましたのでございまして、わたくしはその初代町長をねらって立候補したのでございました。

どうして、ちっぽけな地盤しかもたぬわたくしが、八千票をもっておいでのはずのGさんを破ったか、と、とききたずねられますが、その答は、第一に、そう申してははなはだ失礼でございますが、Gさんの人物が、何と申しますか、まあちよつと軽かったと申しましょうか。Gさんは福江の旧家の旦那であり、長いこと町会議員もつとめられていたひとかどの人物ではございますが、どこか軽いところがあるのでございましょうか。

先日、渥美町の神社協会の会長として町議会にやってこられて、お糸船の補助金を二万円から五万円に引きあげてもらいたいと陳情されました。お糸船と申しますのは、毎年七月上旬になりますと、新しい繭まゆからとれた絹糸をば、伊勢の皇大神宮へ奉納するために、福江の港から船を仕立てて出帆するのであります。何しろ皇祖をお祭りしてあるお宮相手のことですから、昔から町でも補助をいたすのが恒例になっておりました。

ところが、あいにく、わたくしどもの議会には、今度の選挙で、三人も共産党議員が出てきたのでございます。町長といたしましても、たいへんやりにくいのでございますが、共産党は無神論者なのです。とかく皇大神宮といつても、あまりうやまつていないらしいのでございます。

連中が、何か文句つけるだろうとおもっていますと、はたして杉浦明平さんが立ちあがりました。杉浦さんは、元町長さんの息子で、東大を出られて、批評家とやら小説家とやら、わけのわからぬ商売で、まあ人の悪口をいう商売でございましょう。お坊っちゃん育ちのせいですか、どちらかといえは、あまりアクの強い方ではございませんが、それでもやはり共産党にはいって、だいぶ人が悪くなつたようでございます。その杉浦議員が立って、Gさんに質問しました。

「いたい、二万円だの五万円だの、何にいますか」

Gさんは、アマテラスオオミカミさまの看板にたいして、ケチをつけるものがあるうとは予期しなかったのかもしれませんが。すこしあわてて、

「その、あれやこれや、いろいろ経費があるもんですから」

「お糸そのものは、蚕を飼ってる人がただで寄付するんでしょう？　そうすると、具体的に何に経費があるんですか。具体的に」

「いや、その、たとえば、ええ、船を借りますのに……」

「お糸の船はただで借りるんじゃないですか」

「ハア、船のほうはただですが、その、いろいろ費用が、その……」

杉浦さんは、ニヤリとわらうのをこらえて、いっそうまじめそうな表情をこしらえながら、
「すると、五万円の飲みしろというわけですか」

杉浦議員の向かい側に議席をもっている、これまた共産党の清田和夫さんも立ちあがって、
「新町成立早々で、莫大な借金をしょいこんでいるときだから、不用不急の費用は節約していただきたい」と、わたくしに向かつて注文しました。

わたくしが、「ハア、よくうけたまわっておきます」と答えているとき、Gさんも杉浦議員にたいして、

「その費用というのは、お糸につきそってもらう人にもかかりますので、たとえば、警察のかた……」

やれやれ、あの方たち、つまり共産党の前で、うっかり警察などと口をすべらしたら、それだけで目の色が変わってしまいます。相手を区別しないで、警察などと口走るところが、Gさんの軽いところでごいましょう。杉浦さんは、今までからかい気味だったとしたら、この瞬間から、急に戦闘的な口調に一変しました。

「警察？ 警察がいったいお糸となんの関係があるんですか？ 警察に飲ませる金を町に出させようというのかね」

Gさんの眉のあいだにこぶが盛りあがりました。それはGさんのきげんのわるいしるしだという話をきいたことがあります。

今日は、Gさんは陳情者ですから、その点でぐっと辛抱したらしく、

「お糸を伊勢の大神宮に納めるのは、何百年いらいの習慣になっていまして、幕末ごろには、伊良湖水道界限におきましては、海賊がさかんに出沒いたしましたので、それで、護衛のために警察を同乗させることになったのだと聞いております」

「へエッ、そうですか」と杉浦議員は、ことさら意地悪い声を出しました。

「そうすると、戦後十年たった今でも、伊良湖岬か神島あたりから海賊が出てくるというわけですか。ハッハッ」

議員一同、ガラガラわらいだしました。

Gさんは、ほうほうのていで退場いたしました。が、わたくしとしては、このあいだの町長選挙の競争相手が、頭を下げてたのみにきたのを、むげにことわるわけにもゆきませんので、「何とか考

慮していただきたい」と議員のみなさんにおはかりしました。「神さま相手ならしかたない。五万円出してやれや。どうせ警察や禰宜ねぎさの飲みしろだがな」と、共産党以外の賛成をえて、五万円を出したのでございます。

ともかく、このように、わたくしの相手のGさんの人物には、軽いところがあるのでございます。そのうえ、Gさんはお旦那衆の生まれで、ふつうのときには、頭を下げるのがおきらいの様子です。ただ選挙が近くなると、急に近所隣りにも愛想がよくなり、もう、ほんのちょっとした知合いのはしくれに死人が出ようものなら、大よろこびでコウデンを包んでかけつけ、お通夜の上席にすわりこまれるそうですが、常日ごろは気位の高いかたでございますから、貧乏人がおじぎしても、あまりていねいなあいさつもいたされません。

ところが、わたくしのほうは、五十年近く小学校の教員をつとめて、各地を転々といたしたせいいか、おじぎをしても金のかかるわけじゃなし、けっして損はないと、長い経験からおじぎが身についてしまっております。たしかに、わたくしの評判が一般に悪くないのは、腰の低いためでもございましょう。表紙おもては（と申しますのは太平洋沿岸のことです）では、「一町も先から、だれか知らない人がニコニコ頭を下げてきたら、勘作さんと思えばまちがいない」といつてくださるかたもございます。中には、「なに、あれは低頭戦術さ」と批評される人もないではございませんが、わたくしはだれにでも頭を下げることを処世のモットーとしておるのでございます。

ついこのあいだも、夕暮れに、田んぼで遠くからおじぎしたところ、向こうがだまっているの、どうもおかしいとおもって近づいたら、相手はかかしでございました。この地方では、最近ほ田んぼ

にあまりかしなど立てないので、うっかり人間だと信じたのです。こういう失敗はあっても、やはり、人はおじぎしてもらおうとうれいものだといいことを、わたくしは知っておりますのです。

そのうえ、わたくしは、若いころ福江にも泉にも先生をしていたので、そのころ鼻水をたらしていた教え子が、もう五十歳にもなって、町や村の中堅から長老におさまっておりまして、選挙のときには、陰になり日向になり、わたくしを応援してくれたものでございます。

もう一つ、わたくしに有力な力となったのは、戦後、田舎に引き揚げていらい、せっせと各地のPTAや母の会に招かれて講話をいたしてきたことでございます。わたくしは、とてもおしゃべりで長舌で、その点なら、共産党の清田さんにも福江中学の浅井校長にもひけをとらぬ覚悟であります。

わたくしの後輩と申しまでも、わたくしより頭が禿げておりますが、いま、町の教育長をしておる間瀬広四君などは、わたくしが婦人会で一席あいさつしようと立ちあがりますと、かならず肘をつかんで、「町長さん、五分以上しゃべっちゃいけませんよ。わたしが時間を見ています」と忠告してくれます。そしてふとった腹から懐中時計を取り出して、時間をはかっておるもんだから、さすがのわたくしも、つい十分ぐらいで打ち切るといふようになります。すると教育長は、「今日は、町長さんの話は、みじかくてよかったです」とほめてくれます。

が、じっさいは、わたくしの話は、教育長のいうほど評判は悪くないはずでございます。

わたくしの講話は評判が悪いどころか、どこかの村へ行っても、とても人気があるのでございます。浅井さんのように、まじめ一点ばりではだめですが、わたくしの話には、ところどころへ、ちよっぴりエロ味をきかせてございます。エロは、人間の本性上、これを好まないものは一人もございません。

が、とくに、わたくしの話は、おばあさんやおかみさんによるこばれました。

気合いのかかった青年たちは、

「勘作さんの話には民主的な要素はぜんぜんない。古い戦前の修身道徳に色をつけただけのものだ。あれは社会学級の講話というより、勘作マンザイといったほうがええ」などと申しますが、婆さんや嫁さんたちは、「勘作さん、勘作さん」と、わたくしを歓迎してくれますよ。もちろん、しわくちやの婆さんより、若い嫁さんに、「勘作さん」と呼ばれるほうが、はるかにうれしいですな。

若い衆だって、わたくしのことを勘作マンザイなどと悪口いうけれど、会って話をしてみれば、「あのじい、話がわかる」というようです。小塩津部落のO君など、かなり赤くて勇ましい若者ですが、選挙のときには、わたくしの応援のため、ビスモーター（モーターをつけた自転車）で、町じゅうかけまわってくれました。

O君のおかげですか、じつは共産党も、Gさんではなくて、わたくしを応援してくれたんでございます。杉浦さんの折立部落などは、区長さん以下役員の衆がみんなGさんの応援をしているのに、杉浦さんは、「勘作の方がええぞ」と、わたくしに力を入れてくださいました。勘作を応援すると、引きついでおこなわれる町会議員選挙に不利だからと、杉浦さんの運動員は、町長選挙に杉浦さんが動かないようにおしとめるのに、一生けんめいだったということです。

こういうぐあいで、小さな地盤に立ったわたくしが当選できたのでございます。

ところが、共産党はわたくしを応援しながら、わたくしが町長になりますと、さっそく細胞機関紙「新渥美」は、「渥美町名士列伝」のイの一番にこのわたくしをとりあげて、要領がええだけで政治

的識見があるわけではない、だの、出張費かせぎをやめてくれ、だの、さんざんこきおろしたものでございます。

しかも、そのおわりはこんなふうでございました。

「勘作さんは一師出身、名古屋から半田で三十年近く校長生活をすごした。戦後、半田市長に立候補したが惜しくも落選。その後、農地改革で土地を収用されるのを心配して郷里和地に引き揚げ、一町歩以上を一家の先頭に立って耕作してきた。伊良湖岬村長時代、役場の帰りには田んぼにかけつけるか、さもなくば福江の紅灯街へ助役といっしょに出張、というその精力の旺盛さは、年や体つきに似あわないと村民を驚嘆させた。酔えば芸妓や女中相手に『芸者ワルツ』も踊る。相当な狸爺である」

どこでお調べになったか、よくもまあ、あることないこと調べて書いたものでございます。どうせ、こんな悪口を書くのは、杉浦さんでございましょう。

どうも、いつものくせが出て、つい長くしゃべりすぎて、また後で教育長にたしなめられることでございましょう。まことに失礼いたしましたしてございます。

では、次は議長さん、どうぞ。

なんだ、今度はおれの番か。

おれは渥美町議会議長川口釜之助であります。そこにいる杉浦明平君が、おれのことをさんざん宣

伝してくれたおかげで、おれの名前もだいぶ有名になったで、ごぞんじの衆も多からうとおもいます。だが、おれは明平君の本なんぞ読みはせんぞ。どうせ太平の息子だで、悪口ぐらいしか言わんだろうでな。じぶんの悪口の書いてある本なぞ、きまりわりくて読めるもんですかい。

おれは小中山の漁師で、このあいだまで、じぶんもタコガメをやっておったで、この腕を見てみる。若いときには八十貫ぐらいのものはらくらく持ちあげたし、牛の曳く車を後へ引っ張りもどしたこともあるで、近ごろの若いやつらと力がちがうて。おれの兄貴は鍋之助といった。何をわらうだ。ほんとうの話だ。兄貴の鍋之助は早く死んだでな。おれは小中山の貧乏漁師の代表として、三代で町会に打って出ただ。務の方が少し若いが、今度務が出るまでは、おれが小中山から一番若くて町会に出たレコードをもっておったのだ。おれの議会生活も、もう三十年になって、ついこのあいだも県で表彰してもらったところだ。

おれが町会に出たころはおもしろかったぞ。おれに反対した石井（議員）の野郎を、議場のまん中でひっつかまえて、左手で首っ玉を猫のようにつるしあげ、右手で背骨がまがるほどぶんぐつてくわした。石井の野郎、「今後はぜったいに君のいうことに楯つかぬから、命だけはたすけてくれ」と泣いてあやまりおったで、ゆるしてやったが、じつに愉快だったぞ。

明平君のおやじの太平君が町長しておるときに、町長室で気に入るわねことがあったで、テーブルの上においてあった火鉢を太平君にぶちくわしたが、これはうまく当らなんだよ。そこへ、そこにいる寅男のおやじの林芳吉や、前の町長①（渡辺長作）も加わって、灰だらけになって大乱闘をやったもんだ。今みたいに、民主主義だ、暴力はいかななどと、だれもいふものはなかったし、福江には芸妓

が五十人もいたで（今はたった三人だけだが）、女の取りあい、なぐりあいをするちゅうぐあいで、あのじぶんの方が活気があつておもしろかったな。

おれのいうことをきかんやつは、町会のあとの宴会のとき、井筒万の二階からほうり出してやつたが、今考えてみると、よく首の骨を折らなんだもんだな。

しかし、おれの喧嘩仲間も、みんな死んだり、政治をやめて金もうけに一生けんめいだ。おれのたきめのめした石井の野郎は死にしまったし、芳吉も①も、うまいぐあいに町長になりやがつたが、今じゃ隠居だ。

芳吉や①で町長がつとまるぐらいなら、おれにだってつとまるで、おれも①をもう一ぺん町長に当選させてやろうと、大いに力こぶをいれただがなあ。①はどうせ脳溢血で、町長の任期中に死んでしまふ、そうすると、町会が全員一致で、おれを推薦して、おれが、町長に当選するという段どりだつたのに、①の野郎、二度目の町長選挙のときには、よほど人氣がなかったとみえて、みごとに落選してしまつて、おれが町長になる計画もぶつつぶれちゃったわい。何しろあの選挙では、共産党が、町会がストリップを視察に行つただ、雅叙園で金屏風を破つただと演説して歩きおつたで、それがひびいて、①のやつ、みごとに落ちちまいやがつたんだよ。

あれで、おれの町長の夢はおじやんになつてしまつたて。①の野郎も、あれで一ぺんに血圧が高くなつて、今じゃ杖をついてヨボヨボ歩いてけつかる。

それでも、あの道だけは別だと見えるな。道を歩くにもヨタヨタしておるのに、それでもひと月に一回はかならず蒲郡の別宅へ出かけるだけいなぞ。十三里をバスから汽車に乗りかえて向こうへ着く